

ささいな恐怖

彼女のしあわせ



GIMA

須田真知子の消息を知ったのは、偶然であった。

久しぶりの休日、繁華街をぶらついてたときにたまたま会った、高校時代の元同級生、和美から聞いたのだ。

顔を合わすなり、和美は10年ぶりの同窓会をすっぽかした私をなじった。

.....これは私が悪かった。

YESの返事をしておいたのだが、当日になって、仕事が入ったのである。

ま、立ち話もなんなので、手近な喫茶店に入った。

ひとしきり文句を聞かされて、次に出た話題が須田真知子のことだった。

「まあいいわ。あんた仕事が病院関係だもんね。そんな事もあるよね。.....でさ。話変わるけど、あんた須田真知子って、覚えてる？」

20秒ほど考えて、私は首を左右に振った。

「.....でしょ。あたしもそうだった。顔と名前合わせて、やっと思い出したのよ。こう言えばわかるんじゃない？ なんとなく暗くてさ、いるのかいないのかわからない、影の薄い子」

「ああ！ あの須田真知子！」

思わず叫んでしまい、和美はケラケラと笑った。

「そう。『あの』須田真知子よ。同窓会に来てたの。誰も思い出せなくてねー。乾杯してから、一人ずつ挨拶したときに、やっとわかったぐらいなんだわ」

「.....で？ 彼女がどうかしたの？」

「んー。やけに幸せそうに見えたのよね.....」

「なにそれ。けっこうなことじゃないの。なに不思議がるの」

「いえね。風のうわさに、あの子、たちの悪い男に引っかかっているって聞いたから。ヒモ同然で、そいつを養うのに、人に言いにくいようなこともしてるとか.....って」

「なのに、実際会ってみたら幸せそうだったので、意外だった.....と」

「うん。顔色は今一つだし、こう言っちゃなんだけど、服装もぱっとしないしで.....でも、なんか、うれしそうだったのよ。.....でね。訊いてみたんだわ。『なんかうれしそうだけど、いい

ことでもあったの』って」

「やだ、わざわざ訊いたわけ？ 悪趣味ー。……それで？」

私も人のことは言えない。

「なんかね、『もうすぐ、あの人がずっといてくれるようになるから』……って。さすがにあたしらも、それ以上訊けなくって」

「ふう～ん。だんなが……正式なだんなかどうか知らないけど、心を入れ替えたってことなのかなあ」

「どうかなあ。あたしには、どうもそうは考えにくいんだけどなあ」

パフェのスプーンをくわえたまま、和美は言った。

それが、1ヶ月ちょっと前のことである。

朝9時をちょっと過ぎた頃。

「先生。岸壁署から要請です。五反田のアパートで男女の遺体。鑑識もすでに向かっているそうです」

電話を受けた私は、コーヒーを飲んでくつろいでいた先生に声をかけた。

ここはある医大の、法医学部である。

私が先生と呼んだのは、ここの助教授で、ちなみに女医。

非常勤で監察医もしているので、時々こういう要請がある。

「OK。すぐ出られるよね？　じゃ行こっか」

女優の名取裕子そっくりの先生は、そう言うと、軽いフットワークで立ち上がった。

監察医。普通の人には聞き慣れない言葉かも知れない。

ごく簡単に言えば、変死した人の死体検案、いわゆる「検死」をおこなう医者のことである。現場で大まかな状況を調べ、場合によっては遺体を病院へ搬送して解剖検査をおこない、組織標本を採るなどして、さらに詳しく検査する。

そんな仕事だ。

たいていの人にはそれを聞くと顔をしかめて気味悪がる。

まあ無理もない。

だから私も、和美のような友人には、医者タマゴとしか言っていない。

現場は、安アパートの1室であった。

入り口に立つ巡査に声をかけ、入ってゆく。

廊下にも、すでにかかなりの腐敗臭が漂っていたが、部屋の中の臭いは、そんな生やさしいものではなかった。

鼻の真ん中を殴られたような衝撃だ。

これまでに何件か経験しているとは言え、きついものはきつい。

6畳2間の2K。奥の部屋の中央に布団が敷かれ、そこに、男女の遺体が寝ていた。

男性——と言っても、一見では性別は分からない。服装から判断する限り.....である。

そちらの状態は無惨だった。

巨人様顔貌。俗に「赤鬼」と呼ばれる状態で、身体が腐敗ガスでふくれあがり、はち切れそうな状態になっている。赤褐色をした顔も同様にふくれあがり、口からは舌がはみ出しそうになっている。

ウジも発生し始めている。

ざっと見て、死後1ヶ月といったところか。

腐乱臭が廊下にまで漂うようになって、アパートの住民が通報したのだ。

奇妙なのは、その腐乱死体の横の、女性の遺体であった。

何の損傷もないように見える。  
寝ている、と言ってもいいほどだ。

「先生。これっていったい……」

両遺体の状態差に、私は思わず先生に言った。

「あ、だめだめ。先入観は禁物よ。とりあえず検死始めましょ」「はい」

先生と私は、遺体の両脇にかがんだ。

私はICレコーダーとメモ帳を用意し、先生の検死を記録する。「男性。年齢は40から50。腹部に、鋭利な刃物によると見られる刺創。上腕部に……」

私たちが検死している近くで、所轄の刑事が携帯電話で報告をしている。

「男は兼松五郎。44歳。尾白組の準構成員。……は？ いえいえ、要するにチンピラっす。女は、内縁の妻で、名前は、えっと……須田。須田真知子。年齢は……」

私は、持っているペンを落としそうになった。

そして、腐乱遺体に寄り添うように横たわる、女性の遺体をまじまじと見つめた……

夕刻、一段落した私たちは、先生の部屋でコーヒータイムを取っていた。

「——ちゃん？」

先生が、私の名を呼んだ。

「はい？」

「五反田のアパートの検案で、あなた、刑事さんの報告を聞いて、なんかびっくりしてたでしょ？ どうしたの？」

「あれ……。やっぱりばれてましたか」

「そりゃまあ、警察官を亭主に持つと、多少はね。……で？」

先生の御主人は、警視庁の警部である。

仕事柄、夫婦で派手な論争をすることも多いが、ありていに言って、おしどり夫婦と言えよう。

私は、1ヶ月前に和美から聞いた話を、話した。

先生の目が、驚きに見開かれてゆく。

「……『あの人がずっといてくれるようになるから』……かあ。なんだか気が滅入る話ねえ」

先生はため息をついた。私たち助手も、同様の気分である。

「たとえどういう形であっても、男がそばにいればよかったのかなあ。なんか……わかんないなあ」

今日の死体検案の結果は、すでに出ている。

大まかではあるが、事件の状況もつかめた。

つまり、こうだ。

男——兼松五郎は、1ヶ月前、アパートの室内で、須田真知子に包丁で刺殺された。

現場の血液反応から、それは間違いない。凶器はきれいに洗われて、台所の包丁立てに置かれていた。

動機は——別れ話のもつれか、なんなのか、正確なところはわからない。

そして、須田真知子の死因は、「衰弱死」であった。「餓死」と言ってもいい。

兼松五郎を殺したあと、須田真知子は死体を布団に寝かせ、自らも布団に入り、寄り添った。

そのまま、食事も一切とらず、ただひたすら、死体と共に過ごしたのだ。  
須田真知子は、死後数日であった。ほんの少し前までは、生きていたことになる。  
和美の話と考え合わせると、犯行の直前に、同窓会に出席したわけだ。  
しあわせは人それぞれ……そんな言葉では、あまりにも陳腐だ。

本当に、それがあんたのしあわせだったのか、須田真知子。